# 和合亮一が「余震」で表したもの 一詩の礫から一

5年 ●●

## •研究の背景

復興支援活動で福島へ行き、震災被害を受けた方のお話を聞いたり、野原と化した町を見た。その活動で私は復興に向けて取り組んでいる人の姿にひどく心を動かされ、大きな震災から復興に向かう人の内面の姿に関心をもった。『和合亮一が語る福島』(鈴木康史、まほろば叢書)を読み、被災6日目からツイッターで震災への怒りや故郷への思いを詩に乗せて発信し続ける和合亮一さんを知り、被災者である和合亮一が書く『詩の礫』を通して震災から復興に向かう人の内面を探る。

#### ・「詩の礫」について

福島在住の詩人・和合亮一氏が被災6日目から「Twitter」で発表を開始した新たな形式の詩。 140字というTwitterの制限の中で湧出する感情のまままさに礫のごとく向かってくる詩の数々は、故郷・福島への愛しさ、肉親、子、友、自然への慟哭、震災への行き場なき怒り、絶対という概念を失った不条理な世界を描いている。

#### •研究方法

【研究1】『詩の礫』を読み作者の内面を研究するのに中心となる言葉を探し出す。

【研究2】 【研究1】で考えた言葉をすべて書き出し、文体や前後の流れ、言葉を隠した時の変化から何を象徴しているのか、どのような時に使われているのか、同じ意味の表現はないのか、考察しグルーピングする。

### •結果•考察

【結果1】

詩の礫を読んで、揺れを表す表現が多く使われており、その中で最も多い言葉が「余震」である。(表以外にも「震度」「強震」などがある)

揺れを表す言葉	個数(個)
余震	8 9
揺れ	5 7
地震	1 8
地の波	3

和合亮一

私は漫災の福島を 言葉で埋め尽くしてやる

詩に書かれている「余震」がすべて「大地震の後に続いて起こる小地震」を表しているのでない。地震用語の意味を超えた「余震」に作者が最も伝えたい何かが込められていると考えたため、「余震」が『詩の礫』の中心となる言葉であると考えた。

## 【結果2】

- ①「大地震の後に続いて起こる小地震を意味する『余震』 この意味で使われている「余震」の中には、実際に地震が起きたと確認 できるものもあった。
- ②「余韻を残す『余震』」

3月22日 22:08 「制御とは何か。余震。」

(

3月23日 23:19

「子供の頃、思っていた。絶対にこの食卓は続く。長男の僕は家族の人気者。僕がおしゃべりをすると、家族は楽しい。毎晩がお祭りだった。余震。」

⇒22:08~23:19までの27個の詩の切れ目に連続で「余震」が使われていた。詩の似た文体から余韻を残していると考える。続く23:21の詩では、文末に「強震」が置かれており、一連のリズムが切れている。ここから実際の地震の流れと同じように詩の流れを締めくくっていることがわる。また、作者のふるさとに対する思いと「余震」を連続して一緒に置くことは、余震の語彙から読者の不安な気持ちを掻き立て、被災地で暮らす人が次なる大きな地震に危惧している様子を読者も感じられる。

## ③「句法的『余震』」

3月20日 22:28

「馬が追う、言葉が追う、余震が追う。馬が来る、言葉が来る、余震が来る。馬に取り残される、言葉に取り残される、余震に取り残される。僕は幼くなるしかない。うわあああん。あかあさーん、おかあさーん。」

3月20日 23:10

「緊急地震速報。馬が追う、言葉が追う、余震が追う。緊急地震速報、馬が来る、言葉が来る、余震が来る。何に、何に追われている。緊急地震速報。命、命に追われている。・・・優しく、優しく・・・。呟く、祖母の命、命が追ってくる。」

⇒大地震の後に続いて起こる小地震の意である。似た文体から詩が投稿された時間は違うが二つの詩は対句になっていると考えられる。後の詩には「緊急地震速報」が付け加えられていることから、このふたつの詩を比べることで、時間が経つにつれ作者の「余震」に対する焦りがみられる。

担当教員:●●

④「作者に呼びかける『余震』|

3月27日 22:44 「しーっ、<mark>余震</mark>だ。」

⇒詩全体をみて、「しーっ、余震だ。」というフレーズが多くみられる。それらはリンクする「余震」や詩全体に緊迫した空気を与える「余震」など、一つ一つの意味は違うが、全て誰かに呼びかけているものであることは共通している。誰に呼びかけているものなのか、はっきりと記述されてはいないが、多くが自分の体験や今の生活に対する不安と一緒に述べられていること、3月27日には「しーっ、余震だ。」を境に作者の気持ちを述べるのを止め福島で今起きている事実が述べられていることから、私は作者自身に余震を体だけでなく心から受け止めるために呼びかけていると考える。

⑤「擬人化された『余震』」

3月23日 23:41

「詩よ。お前をつむごうとすると<mark>余震</mark>の気配がする。お前は地を揺すぶる悪魔と、もしかすると約束を交わしているのか。激しく憤り、口から涎を垂れ流し、すこぶる恐ろしい形相でにらんでいるのだな、原稿用紙の上に首を出し、舌なめずりする悪魔め。」

⇒地震について詩を詠もうとすると、余震の気配がする。作者に激しい 憤りや不安感を抱かせる余震が「悪魔」と表現されている。

4月9日 18:31

「余震。地の波。私たちをあらためて追いたてる、激しい精神。過酷にも地の震えは少しも休めない。逃げる私たちを執拗に追う、地の急襲。」

⇒余震は作者をはじめ被災者を執拗に追い続けたものである。作者をは じめ被災者を精神的に追い詰めた余震が「激しい精神」と表現される。

⑥「作者とリンクする『余震』」

3月19日 22:57

「余震か。否。私はある日、避難所の暗がりで、手帳に何かを書き殴っていた。私の文字は私の心など少しももらえない。しかし書くしかない。この徒労感は初めから勝負が決定している。書いているが、何も書けていないからだ。避難所の暗がりで、私は阿呆な修羅であった。」

⇒大地震の後に続く小地震の意であるが、後の「否。」で打ち消されていることから、この「余震」には、作者が詩を書き殴る激しさ(勢い)と余震の激しさがリンクしていると考える。また、3月19日の詩は「余震か。否。」で始まるものが多く、その余震の役割はすべて作者の姿と余震をリンクしているものだと捉えることが出来る。

⑦「作者の感情の起爆剤である『余震』」

3月20日 23:31 「<mark>余震</mark>。この時、私は命だ。」

3月20日 23:33

「余震。許せるか、あなたは。この怒りを。」

3月20日 23:33

「余震。許せるか、あなたは。この時を。」

⇒後に作者の怒りが述べられていることから、余震は怒りの感情を抱かせるきっかけであると考える。他にも「余震」が作者の感情の起爆剤になっていると考えられるもがある。

⑧「作者の一部である『余震』」

5月25日 22:08

「俺の精神と肉体の独房で、無数の馬が跳ね上がる、<mark>余震</mark>。」

5月25日 22:30

「何億もの馬が、地かを駆け抜けていく。しーっ、余震だ。否。地震酔いだろうか、嫌、確かに・・・、すぐに震度 4 強。わかるようになっているね。ウン、時々ネ。」

⇒大地震の後に続いて起こる小地震の意であり、2つの詩から作者の心の中には余震が常に宿っており、精神的に追い詰められているのが分かる。また、初めに書かれていた怒りや不安ではなく、冷静な気持ちが書かれていることから、長い間余震と共に生活し余震に対する気持ちの変化が分かる。

## •和合亮一が「余震」で表したもの

「余震」は和合亮一を追い立てるものであり、和合亮一の感情である。 「余震」は暮らしやふるさとを更にぐちゃぐちゃにし、和合亮一を更に不安な気持ちにさせ続けたものである。余震が起こるたびに3.11の震災当日を思い出させるとともに、明日には自分の生活が消滅するのではないかと更に和合亮一を「追いたてる、激しい精神」であるため、詩をつむごうとすると余震の気配が常に付きまとわれる。和合亮一にとって、震災以前の無邪気に絶対を信じていた生活がなくなったことと、怒りにかられ不安におびえる心のありようを最も表すものが「余震」である。

参考文献 和合亮一『詩の礫』(徳間書店、2011年) 謝辞 本研究は奈良女子大学文学部の●●先生にご助言をいただきました。 深く感謝申し上げます。

	01/21/21/21		0121.465
詩の内容	分析と考察	詩の内容	分析と考察
3月16日 23:50 「また揺れた。とても大きな揺れ。 ずっと予告されている大きな余震 がいよいよなのかもしれない。 (以下略)」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。	22:57 「余震か。否。私はある日、避難所の暗がりで、手帳に何かを書き殴っていた。私の文字は私の心など少しももらえない。しかし書くしかない。この徒労感は初めから勝負が決定している。書いているが、何も書けていないからだ。避難所の暗がりで、	後に続く「否。」で打ち消されている 余震は避難所の暗闇で書き殴ってい る作者の激しさ(勢い)と余震の激 しさがリンクしている。 「余震か。否。」でリズムを作る。
3月17日 22:18 「ひどい揺れの中で、眠っていたわけではないが、また目が覚めた。 眠ることなど、ほとんどない。いつも目覚めさせられてばかり。揺れ動かされてばかり。しーっ。余 震だ。」	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。 同時に「しーっ。」というフレーズ が、詩の最後に緊張感を持たせる。	私は阿呆な修羅であった。7」  22:32 「余震か。否。私はある日、避難所の正午。米と鶏肉とコンソメスープを貰った。むしゃぶり食べた。舌鼓を打ちながら、書き殴った。帳面を開く『このまま何かが大きく動き続	後に続く「否。」で打ち消されている 余震は米と鶏肉とコンソメスープを むしゃぶり食べ、後から振り返ると 言葉が何を意味していたの変わらな
22:20 「余震とは、真正の地震の余剰で あるとするのなら、これらの地の 震えはものみな全てが、何らかの 上澄みであるのか、地よ。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。	けて、大きく変わらないとしたらどうなるのか』。時の昂然だけが私には思い出せるが、言葉が何を捕らえようとしたか定かではない。」 22:35	い程、帳面に書き殴っている作者の 勢いと余震の勢いがリンクしている。 「余震か。否。」でリズムを作る。
22:24 「震度はどのようにして測る。その度数とはいかなる基準であるのか。ある日は丘の上に立った、小さな旗を眺めていた。あの風にも旗にも、そして揺れるままの現在にも、度数はあるのか。地よ。しーっ、余震だ。」	地震の揺れと共に生活する不安と余 震が起きた時の不安をリンクしてい る。	「余震か。否。帳面もまた壊れていく。私の親しい場所・・・、相馬、新地、仙台若林区、女川、南三陸。この時。避難所のテレビの報告が、死者の数を増やしているかのようだった。私は帳面にこの数を記録した。記録?どうしたいのか、私は。偏頭痛が収まらない。」	後に続く「否。」で打ち消されている 余震は自分の親しい場所で増えてい く死者の数を知り、頭の中で余震が 起こったようにぐちゃぐちゃになっ ていく作者の頭の中とリンクしてい る。 「余震か。否。」でリズムを作る。
22:27 「昨日。ガソリンスタンドに車の 一列。長蛇の列が3時間ほど続く が、一度も動かず。一番前から伝達。「スタンドは開かない」。開 くという事実すら無かった。有っ たのは、車の一列。何が私たちを 並ばせようとするのか、しーっ、 余震だ。」	何も情報がない中生活している自分 と予告なく揺れる余震をリンクして いる。	23:49 「余震(①)。諾。さっき。茨城県沖震度5強。福島震度4.激しい横揺れ。玄関で待機。地鳴りが激しいので階下へ。裸足。地の激しさが増す。僕には羽が生えているんだ。余震、余震、余震、余震(②)。	①大地震の後に続いて起こる小地震の意。実際に起きたと推測される。 (記載あり) ②体(心)が揺れている様子を3つ並べることで表現。
23:33 「まず地鳴りがする。そして揺れる。一瞬、何かがはしゃぐのだ。 ほら、この静けさは騒がしい。 しーっ、余震だ。」	この言葉が読み手に緊迫感を与える。 それは、余震が起こる瞬間のピリピ リした様子を表す	3月20日 22:01 「しーっ、余震だ。何億もの馬が怒 りながら、地の下を駆け抜けてい く。」	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。 詩の最初に緊迫感を与え、揺れの激 しさを強調させる。詩のリズムを作 る。
23:50 「ガソリンもなく、放射能が降ってくるので、今日は家に隠れていた。誰とも語らず、何も考えない。次第に息を殺しているこの部屋そのものが自分で、私はここには居	死者・行方不明者、そして自分自身 も、誰もいなくなり福島が壊された 様子と余震がすべてを壊していく様 子をリンクしている。	22:02 「しーっ、余震だ。何億もの馬が泣 きながら、地の下を駆け抜けてい く。」	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。 詩の最初に緊迫感を与え、後に続く 揺れの悲しさを強調させる。詩のリ ズムを作る。
ないことに気づいた。死者・行方 不明者は13400人。ここには いない。しーっ、余震だ。」	丁をリングしている。	22:05 「ほら、ひづめの音が聞こえるだろう、いななきが聞こえるだろう。何 を追っている、何億もの馬。しーっ、 余震だ。」	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。 詩全体が余震が起こる前兆を表して おり、最後に置くことで緊迫感を残 している。詩のリズムを作る。
3月19日 4:19 「余震。横揺れは激しい。その間 も、水は滴り続けるが。」	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。 倒置を用いることで、余震が起こっ ている間も時間は流れ続くことを強 調。	22:13 「余震。何を追っているのか、馬よ。 世界の暗がりのなか、宇宙のひずみ のなか、両親を亡くした坊やの波か。 もういいじゃないか、追うな、馬よ。 私たちはどんなに傷ついても、何億	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。 後に続く馬は余震と同じ意味を持っ
4:57 「書こうとすると、余震。ならば もっと背中に書いてやる。」	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。 後に続く、強い意気込みから、余震 は作者の怒りの対象であることがわ かる。	ものたてがみを撫でよう。泣きながら、撫でよう優しく、優しく、、。」 22:28	ていると考えられる。 大地震の後に続いて起こる小地震の
22:19 「余震か。否。」 22:22	大地震の後に続いて起こる小地震の意。	「馬が追う、言葉が追う、余震が追う。馬が来る、言葉が来る、余震が来る。馬に取り残される、言葉に取り残される。 (僕は幼くなるしかない。うわあああん。あかあさーん、おかあさーん。」	意であるが、それは馬のように作者を追うもので、作者を取り残すものであり、作者にとって恐ろしいものであることがわかる。この独特なリズムは馬が駆けるよう迫ってくる音、頭の中にあふれ出てくる言葉、作者を襲う余震を表して
「余震か。否。だがしかし、常に、 余震が私に宿るようになってしまった。揺れは恐ろしい。この恐怖が、常に私に何かを書かせる。 詩の礫が夥しく湧いてくる。キーを叩き、メモをする。レコーダーに吹き込む。叫びながら部屋を歩き、床の紙片をこの男は蹴散らし	後に続く「否。」で打ち消されている 余震は詩の礫が夥しく湧いてくる様 子と何かにとり憑かれたようにキー を叩きメモをする作者の様子と余震 の苛烈さがリンクしている。	22:29 「余震。余震。余震。俺はもう終わりかもしんねえが、ここまで馬鹿にされてたまるか。最後の最後に『地震』を滅茶苦茶にしてやっぞ。」	いる。     大地震の後に続いて起こる小地震の意であるが擬人法的表現が使われている、と捉えることができる。    余震(という物)に興味をひかせるために3つ並べる。
さ、床の紙片をこの男は蹴散らしている。宇宙の中に一人。鹿の鳴き声。」		22:43 「余震もまた怒るのか。そして全て の激怒をきれいに忘れてしまうの か。」	大地震の後に続いて起こる小地震の 意であるが擬人法的表現が使われて いる、と捉えることができる。

詩のリズムを作る。

詩の内容	考察	詩の内容	分析と考察
22:57 「長い余震の後で、私たちは子供 たちの手を握るだろう。さらなる 余震の後で手を握ろう。もう大丈 夫だよ・・・。だから、ね・・・。	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。子供の手が震えるほど恐ろしい	22:28 「制御不能。言葉の脅威。余 震。」	現実は制御不能で、「制御」という 言葉に脅される作者の焦りが余震が 起きた時の焦りとリンクする。 詩のリズムを作る。
私たちの大人の手を離さないで。 ぎゅっと強く握ってごらん。ま た・・・。震えている、地も、き みも。」	余震。 ①大地震の後に続いて起こる小地震	22:30 「言葉に驚かされている。言葉に 乞うている。余震。」	作者の形のないもの(言葉)に願う 様子と余震が起きた時形がないもの (神など)に願いたくなる気持ちが リンクする。 詩のリズムを作る。
23:00 「長い <mark>余震</mark> (①)の前。午後4時 7分。431件のメールを受信す る。ヘリコプターの音。余震。 (②)」	の意。 ②ヘリコプターの音と余震(の前兆)がリンクしている。ヘリコプターの音を聞いて余震か、と驚く著者が想像できる。 また、次の詩とのつながりを表していると推測できる。	22:32 「『制御』であってほしいのです。 家族と故郷が、まだ、かろうじて 私にはあります。奪われてしまっ た方に・・・、こんなこと、恵ま れていますよね・・・。泣くしか ありません。私たちは、風吹く荒	震災後(=風吹く荒野)に家族(= 希有な草履)との別れが「制御」で きてほしいと願い泣くしかできない 作者の様子が余震が起きた時の何も できず、ただ泣き願うことしかでき ない様子とリンクする。
23:03 「長い余震のさなか 地の下を駆ける馬の群れの行方には 何がある 私は尋ねたい 何億の現在というものに 否 馬たちは追って	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。 前の詩(23:00)とつながって いるのではと推測できる。	野に、希有な草履を無くしてしまいそうです。余震。」  22:34 「言葉に乞う。どうか優しい言葉	詩のリズムを作る。 作者の形のないもの(言葉)に願う 様子と余震が起きた時形がないもの (神など)に願いたくなる気持ちが
いるのではない 追われているの だ。」	C. 2 A Clare JEWI C C 20	で、いてくださいよ。ね・・・。 <del>余</del> 震。」	(神なと) に願いたくなる気持ちか リンクする。 詩のリズムを作る。
23:10 「緊急地震速報。馬が追う、言葉が追う、余震が追う。緊急地震速報、馬が来る、言葉が来る、余震が来る。余震が来る。今に、何に追われている。緊急地震速報。命、命に追われて	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。 前の詩とは違い、「緊急地震速報」 と付け加えられている。当時緊急地 震速報という言葉がテレビから流れ るだけでとてつもない緊張感が走っ	22:36 「制御。あなたは、たまなく押し 寄せる、太平洋のさざなみを、優 しく止めることができるのか。余 震。」	詩のリズムを作る。
いる。・・・優しく、優し く・・・。呟く、祖母の命、命が 追ってくる。」 23:31	た。よってこの時の作者の心は張り 詰められていると考えられる。	22:38 「制御。あなたは、こんなにも愛 しい人への想いを、静かにとどめ ることが出来るか。できないと思 うよ。余震。」	詩のリズムを作る。
「余震。この時、私は命だ。」 23:33 「余震。許せるか、あなたは。こ の怒りを。」	3つの詩のリズムを作る。 余震の後に作者の怒が述べられてい ることから、余震は作者の怒りの起	22:39 「制御。あなたは驚くほどにあな ただ。あなたほど、あなたである	前後の文から、余震という言葉は 「受け止めることが出来る」という
23:33 「 <mark>余震</mark> 。許せるか、あなたは。こ の時を。」	爆剤であるとわかる。	人はいない。あなたであること。 優しく受け止めることができるか。 余震。そして僕はそんなあなただ から、愛しているのに。」	意味を示しており、作者の強い気持ちでもあることがわかる。 詩のリズムを作る。
23:35 「人よ、原子力よ、宇宙よ、封鎖 された駅よ、失われた卒業式よ、 余震だ。」	前に述べられたものはすべて、地震 によって壊されたもので、余震に よってさらに壊されるものである。 大地震の後に続いて起こる小地震の 意であるが、作者は呼びかけている。	22:42 「あなたは誰よりも早く、しなやかに、あなたであり続ける。そんなあなたを愛しています。余震。あなた、大切なあなた。「大切なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりない。	前文から作者の強い気持ちであることが推測できる。 詩のリズムを作る。
23:53 「 <mark>余震</mark> よ、静かに。子供たちが、 お年寄りが、眠れないから・・・。	大地震の後に続いて起こる小地震の意であるが、まるで余震と友達のよ	は、の後には「めなた」しか、続かないのです。安否不明。166 30人以上。」 22:47 (前書) 「昨日の「礫の礫」を書き終えたら急に「礫」そのものの内部に うってみたくなりました。阿呆な 修羅です。おけき合いください 余震は	
ほら、真夜中の、福島の、木陰で、 水を飲み、草をお食べ、そうしな さいよ。」	うに擬人法的に使われている。後に は著者の収まってほしいという切実 な思いが述べられている。		詩の一部ではない、前書きにも余震という言葉が使われている。また3月22日の詩は「礫」の内部が書かれていることがわかる。ここかから、余震は「礫」の内部であり一部であることが考察できる。
3月22日 22:08 「制御とは何か。余震。」	詩のリズムを作る。	余震。」 22:50	詩のリズムを作る。
22:13 「あなたは『制御』しているのか、 原子力を。 <mark>余震</mark> 。」	詩のリズムを作る。	「現時点。死亡4304人、安否 不明16630人、500、55 5。今日の現実に対して詩を捧げ ます。余震。」	詩のリズムを作る。
22:16 「人類は原子力の素顔を見たこと があるか。余 <mark>震</mark> 。」	詩のリズムを作る。	22:58 「『福島第一 制御困難』。来る べき時が来たのか、否。希望を信 じるか。余震。大きい。まただ。 ツイッターガウゴイテクレナイ、 震度4。この速度の出しにくさは、 困難。制御。第一。福島。」	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。 「余震」を境に詩の流れがかわって いるのがわかる。希望を信じようと 思ったが、余震という現実を目の当
22:24 「相馬の果てなき泥地よ。無人の 小高の町よ。波を横腹に受けた新 地の駅よ。国道に倒れた、横田俺 の漁船よ。余震。」	詩のリズムを作る。		たりにしていることが分かる。 ここから余震は作者を苦しめるものでもあり、希望を失うものでもある。 詩のリズムを作る。
22:27 「巨大な力を制御することの難しさが今、福島に二重に与えられてしまっている。自然と人工とが、制御できない脅威という点で重なっていく。余震。」	作者の将来、原発をどのように制御するのか不安な気持ちと余震が起きた時の不安な気持ちがリンクしている。 詩のリズムを作る。	22:58 「制御の前線。『信じよう』。 <mark>余</mark> 震。細々と暮らせばいい。	大地震の後に続いて起こる小地震の意。 「余震」を境に詩の流れがかわっているのがわかる。信じようと思ったが、余震という現実を目の当たりにし、期待は無くなった。ここから余震は作者を苦しめるものでもあり、希望を失うものでもある。

詩の内容	考察	詩の内容	 分析と考察
23:00 「明日、あなたは何をしていますか。 明日も今日の延長を生きる。余震。」	詩のリズムを作る。	22:25 「余 震。 原 稿 用 紙 に 文 字 を 埋 め る 。 ま	大地震の後に続いて起こる小地震の
23:02 「明日、あなたは何をしていますか。 明日も今日の延長を耐える。余震。」	詩のリズムを作る。	た 余 震。埋 め つ く す し か な い の だ 、 震 え る 現 在 を 。」	意。文字の並びから揺れの強さが分かる。
23:03 「『フクシマ』は一晩で世界に広まった、むしろチャンスだと思う、と地元のある番組で言っていた。ここで復興することが出来たら、世界に名を示すことが出来る、ともう一言。余震。」	詩のリズムを作る。 番組で震災・原発事故を逆手に とって、世界に名を示すチャン スだと述べたことに対する、作 者の気持ちを表している。	「余震。揺れている。私が揺れているのかもしれない。揺れている おいっか 語れている 揺れている 私が揺れている私が揺れている私が揺れている私が揺れている私を揺すぶっている私を揺すぶっている私を揺すぶっている私を揺すぶる。」	後に続く詩から、作者は平常心を取 り乱している。「余震」は作者の感 情の起爆剤となっている。
23:06 「希望を抱いた。有難いと思った。そんなご褒美があるのかもしれない。でもね。ここには家族と故郷があるんだよ。僕は突然に世界地図を燃やすかもしれない。余震。」 23:07	詩のリズムを作る。 1つ前の詩と続く作者の気持ちが 表れている。	22:32 「たくさんの馬の背。そこから地鳴りがして、余震だ。浮かんでいる。たゆたっている。運ばれてくる。何。時。真理。命。悲しみ。 怒り。慈しみ。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。
23.07   「静かです。放射能の夜です。余   <mark>震</mark> 。」	詩のリズムを作る。	23:29	①大地震の後に続いて起こる小地震 の意。
23:09 「家族を守ることと、『制御』とが、 どうしてイコールでなくてはいけない のか。あのさ。日本社会よ。そろそろ 僕は爪を切ろう。余震。」 23:15	詩のリズムを作る。	「余震(①)。いわき震度5. それにしても4や5が普通の感覚になっているのが、あらためて恐ろしい。息子と電話で話す。今の避難先の、山形の学校に、一時的にでも転入することも考えなくて・・・な。余震(②)か。」	②後ろに続く疑問から大地震の後に 続く小地震の意と考えるのは難しく、 詩のリズムを作っている小野ではない。疑問が続いていることから、著 者の家族との離れを考え、めまいが するような悲しさを表しているので はないか。
「私は言葉を制御することが出来ない。 余震。」	詩のリズムを作る。 作者の強い意志が表されている。		後に続く詩から、作者は余震に対し て動揺を見せていると考えられるこ
23:16 「子供の頃、思っていた。絶対にこの 毎日は続く。僕は小さいままだ・・・、 と。優しい両親だったから、余震。」	詩のリズムを作る。 絶対がない世界を知った作者の 気持ちが表されている。	23:26 「余震。揺れていない。私が揺れ ていないのかもしれない。揺れて いない私が揺れていない。揺れて	とから「余震」は作者の感情の起爆 剤となっている。 また、22:28の詩と対句になっ ている。22:28の投稿では、余 震が起こると、私が揺れているのか
23:19 「子供の頃、思っていた。絶対にこの 食卓は続く。長男の僕は家族の人気者。 僕がおしゃべりすると、家族は楽しい。 毎晩がお祭りだった。余震。」	詩のリズムを作る。 絶対がない世界を知った作者の 気持ちが表されている。	いない私が揺れていない私を揺す ぶっていない。揺れていない私が 揺れていない私を揺すぶっていな い私を揺すぶっていない。揺れて いない私が揺れていない私を揺す ぶっていない私を揺すぶっていな い私を。」	もしれない。更に、揺れている私を 私が揺すぶっているのかもしれない、 と余震とともに揺れる作者の弱い心 が書かれているが、22:36の投 稿では余震が起きても揺れない、揺れ れていないのかもしれないし、揺れ ていない私を揺すぶることはないと 余震負けない作者の強い心が書かれ
3月23日 前書 「今日も余震が多くて 横揺れが激し	始めて、詩の前書きに余震が多		示戻員けない作者の強い心が書かれ ている。この二つから、作者の余震 に対する気持ちの変化が分かる。
いです もしもの時 途切れたとして も 必ず どんな形でも 続きをいた しますから 心配なさらないで 下さ い 揺れが大きい」	いことが書かれている。 2 2 日 の詩とこのことから、この時の 作者は余震に悩まされていたと 推測できる。	23:39 「余震はなこの辺の犬が全部吠えるんだ!いいか、余震はなこの辺の犬が全部吠えるんだ!いいかい	大地震の後に続いて起こる小地震の 意であり、同時に「いいか」と人に
22:05 「余震だ。不覚にも朝方に、何億もの 馬たちに襲われる。すっかりと慌てた 僕はコードを抜き、くるり振り向き、 パソコンを持ち、階下へ。背中で激し く、倒れた音を聞きながら。」	大地震の後に続いて起こる小地 震の意。 「何億もの馬たちに襲われる」 は余震を意味しており、余震の 激しさを表現している。	えるんだ! <mark>余震</mark> はなこの辺の犬が 全部吠えるんだ!いいか <mark>余震</mark> はこ て動揺を見せて	確認を呼び掛けていることと語尾の 強い言い方から、作者は余震に対し て動揺を見せており、「余震」は作 者の感情の起爆剤となっている。
22:18 「余震。何億もの馬。空に駆け上がろうとしているのだろうか。息を殺して、現在を黙らせるしかない。」	大地震の後に続いて起こる小地 震の意。「何億もの馬」は余震 を意味している。 詩のリズムを作る。	23:41 「詩よ。お前をつむごうとすると 余震の気配がする。お前は地を揺 すぶる悪魔と、もしかすると約束 を交わしているのか。激しく憤り、 口から涎を垂れ流し、すこぶる恐	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。また、「余震」は擬人化されて おり、地震について詩を詠もうとす ると、余震の気配がする。作者に激 しい情りや不安感を抱かせる余震が
2 2 : 2 1 「 <mark>余震</mark> 。茶碗を洗っている息を殺して、 現在を洗いつくすしかない。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。	ろしい形相でにらんでいるのだな、 原稿用紙の上に首を出し、舌なめ ずりする悪魔め。」	「悪魔」と表現されている。
	詩のリズムを作る。		
•		3月24日25日 前書 「10日ぶりの買い出し。トマト を買おうと思ったら余震。家に持 ち帰り、野菜が涙を流しているの が分かった。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。

が分かった。」

詩の内容	分析と考察
後記3 今日の余震もひどい横揺れでした。かすかな横揺れ。それが長く続いて、ゆっくりと激しい横揺れと音が響いてきます。近づいてくる、地。惨事の中、暗闇を進むしかない。たゆたいながら、希望をもって生きていきます。だからあなた。生きていてください。生きていって下さい。明けない夜はない。」	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。 「近づいてくる、地。惨事の中、暗 闇を進むしかない。たゆたいながら、 希望をもって生きていきます。」は 余震の中暮らす、作者の強い気持ち。
3月27日 22:14 「私はガソリンを求めて街を行く。 もうじき切れてしまうからだ。地 震、余震、津波、放射能、風評被 害。昨日、発電所から20~30 キロ圏内の、最大2000人が 避難対象となった。私は私を罵倒 するようになった。かなり蝕まれ ているな、精神。たくさんの影、 風評。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意であり、作者を襲ったもの。
22:44 「しーっ、余震だ。」	この投稿の前には、福島で今起きている事実(飯館村の牛、ガソリンを求める車の列など)が書かれているが、この投稿の後は作者のことや気持ちが書かれている。この投稿を境に内容が変わっていることから、詩のリズムを作り、文脈を大きく変化させる役割をしていると考える。
3月29日 通信 「◎今、書きたいことがたくさんあります。震災、津波、原発、原発、ア・・・。福島、東北、日本・・・・。詩の礫が一方にがらいてきて、もはや手といけかない。できてくようになっくりと離れています。のできます。のよっとがない。皆さんのメッセージだけが、心の明かりです。」	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。(3月29日宮城県、福島県で 震度4の地震が発生)
3月30日 22:24 「また、余震だ。しーっ。」	いまままで多くみられた、「しーっ、 余震だ。」と言葉の並びが違い、 「余震だ。」が先に言われていることから、大地震の後に続いて起こる 小地震の意と考えられる。 また詩の前後で大きく雰囲気が変わることから、詩のリズムを作り、文脈を大きく変える役割をしていると 考える。
4月1日 22:05 「そして、私の風呂は余震(①)のうちに、一昨日から、壊れたままだ。まず、バスタブの電気が消えた。翌日には点いた。すると今度は、風呂が消えた。余震(②)。」	①大地震の後に続いて起こる小地震の意。 ②大地震の後に続いて起こる小地震の意であるが、文末に倒置されていることから、①とは違い、「作者の(生活の一部である)風呂を壊した余震」に対する怒りが込められていると考える。
22:50 「友人にメールをする。『なんだか、福島という言葉の響きは完全に変わってしまったね』。無人の回送バスが素通りしていく。余震か。否。バス停に貼られた紙が、風で飛んだ。追いかけたが、すっと、さらに遠くへ。福島、ふくしま。」	大地震の後に続いて起こる小地震の 意地考えることもできるが、後に続 く詩から、地震が起き、身の回りが すぐちゃぐちゃになった空想の世界 を表していると考えた。「否。」と 否定することで、空想の世界ではな く現実であることを表す。
23:36	この後の投稿には、3月11日に震

災にあったNさんの話が続いている。

そこから、これは後の投稿に続く 「余震」で、大地震の後に続いて起

また前文で、じわじわと余震が迫っ

てくる表現を使い、文全体で余震の

こる小地震の意である。

リズムを表している。

「悪魔め、悪魔。フン、おまえの 弱音を聞いていたら、今日も嫌に

なったわい。特にお前は相当弱っ ているな。ゆっくりと地の底から、

大きな魚がやってきて、体をひる がえして潜っていくかのような、

余震。」

詩の内容	分析と考察
4月8日 通信 「◎『しーっ、余震(①)だ』。 昨晩の余震(②)の後で大丈夫で したか?というメッセージを数多 くいただきました。かなり大きい ものでした。書斎は本棚が動き、 本や置物などが落ちたりして大変 でした。でも大丈夫です。ありが とうございました。」	①『』は作者の昨日の揺れた時の気持ちを表している。 ②大地震の後に続いて起こる小地震の意。
4月9日 18:31 「余震。地の波。私たちをあらためて追いたてる、激しい精神。過酷にも地の震えは少しも休めない。逃げる私たちを執拗に追う、地の急襲。」	余震は作者をはじめ被災者を執拗に 追い続けたものである。精神的に追 い詰めた余震は詩では「激しい精 神」と擬人化されている。
22:27 「地震酔い、醒めやらない揺れの中で私たち、地震酔い、揺れていなくても揺れている、揺れていても揺れている、揺れていても揺れていなくても揺れていなくても揺れていなくても揺れていない、揺りかごの中で、しーっ、余震だ。」	この投稿までは、地震について書かれた詩であるが、これ以降の投稿は、生活について書かれた詩であることから、詩のリセット(切り替え)の役割をしていると考える。
22:54 「四月七日、午後十時、余震。宮 城県沖、震度6強。地の底から地 団駄。」	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。(4月7日午後11時32分に 宮城県沖で地震が発生)
22:56 「余震(①)。地の波。私たちをあらためて追いたてる、激しい精神。過酷にも地の震えは少しも手を休めない。逃げる私たちを執拗に追う、地の急襲。四月七日。午後十時、余震(②)。宮城県沖、震度6強。もはや、宇宙からの断罪。」	①大地震の後に続いて起こる小地震の意。 ②大地震の後に続いて起こる小地震の意。後に続く、「宇宙からの断罪」から、作者の生活に与えた余震の衝撃が分かる。(それが物理的なものなのか気持ちなのかは不明)
23:00 「探す。無い。探す。無い。祖母の絵。無い。探す。見つからない。私が探しているのは、貼り絵だが、それだけでは無い。探す。私が探しているのは貼り絵だが、祖母の姿を探している。探す。無い。余震。」	続けて投稿されており、二つの詩は、 最後に「余震」と置かれている。探 しても見つからない祖母の姿、祖母 の絵を探し続けてぐちゃぐちゃに
23:01 「ばあちゃん、何処にいますか、 ばあちゃん。瓦礫の中で家族を探 している人々よ、今夜は共に 泣きましょう。共に探しましょう。 共に泣きましょう。余震。	なっていく作者の心の様子を表していると考えることが出来る。
5月25日 22:08 「俺の精神と肉体の独房で、無数 の馬が跳ね上がる、余震。」	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。 この詩から、作者の心の中には 余震が常に宿っており、精神的に追 い詰められていることが分かる。
22:30 「何億もの馬が、地かを駆け抜けていく。しーっ、余震だ。否。地震酔いだろうか、嫌、確かに・・・、すぐに震度4強。わかるようになっているね。ウン、時々ネ。」	大地震の後に続いて起こる小地震の 意。 この詩は、初めに書かれていた怒り や不安ではなく、冷静な気持ちが書 かれていることから、作者は余震と 共に生活していることが分かる。

# 和合亮一について

わごう・りょういち 1968年福島 県生まれ。1999年第一詩『AFTER』 で第4回中原中也賞、2006年第四詩 集『地球頭脳詩篇』で第47回晩翠賞を 受賞。2011年に東日本大震災では した中からツイッターに投稿を続け、 集『詩の礫』として書籍化されたほか、 一連の活動が高く評価され、第30回 NHK東北放送文化賞を受賞。『詩の礫』 はフランス語訳され、2017年に第1 回ニュンク・レビュー・ポエトリー賞を 受賞。(『詩の礫』より引用)

